

【二月】

元日 元日の行事

全 地区

「正月はいく、盆よりいく。」

父ちゃんにだかれて、あっぱたべて。

おりよりでっかいととそえて、

雪より白いまんまたべて。

指折り数えて待っていた

お正月がやっと来た。」

元日は暗いうちに起きて新品の別珍の足袋を履いて爪皮のかかった下駄を家の中で履き初めしてそのまま外に出て、初詣に出かけました。

そのとき家紋の入った提灯や神前に上げる御神酒すゞを持って行く家もありました。そして、友達や知り合いの人に出会っても声をかけない事でした。

家に帰ると父が豆殻を焚いて若水とお燈明を神棚に上げてお詣りをしました。家族の者も父の後ろで一緒にお詣りしました。

丸餅を焼き雑煮の用意が出来ていて、母もすまなさそうな顔をして膳についていた姿を思い出します。雑煮が終わる頃に年賀状が配達されて、家の中が急ににぎやかになりました。テレビや電話の無かった頃の年賀状はとても楽しみに待っていたものです。また元日は主婦が掃除をしないことにしています。それというのも箒などには八丈が附けられているので使用できません。

それから一日中外出を遠慮し、特に近所に遊びにいけない子供達は兄弟同士でかるたや双六をして遊び、大人は「稲を摘む」(稲は寝ねと同意)

といって殆ど寝床で本を読んだりラジオを聞いていました。元日の街の通りには人気がなく、ひっそりとして淋しい感じをうけるくらいでした。



一日 若木と道切り

山之村 地区

《若木》

正月二日になると山之村地区の男の子のある各家庭では、自分の持ち山から朴の木を伐ってきます。これを道具（鉋、鋸等）の使い初めとっています。三間から四間もある真っ直ぐな朴の木を伐り、細い先の木一間くらい残して後は残らず皮をむきます。先の皮付きのところに白紙で作った八丈を結びます。これを若木と呼んでいます。この若木を家の周囲に子どもの数ほど立てますから、遠くからよく見え、正月の気分がよく出ます。

若木は山作業の無事安全を祈願するための行事で十五日間立てたままにしておきます。なお、若木は後日稲架（はさ）の横木に利用します。

《道切り》

山之村のどの部落にも道切りというものがあります。これは、部落と部落の境界である峠等に作られたもので、その方法は里道を中心に両脇の樹木と樹木

に一条の縄が張られます。樹木の無い場所には新しい木を立てそれに縄が張られます。縄は特殊な物で、七五三の様に房を下げます。この道切りのは十本三本が交互に垂れた物で、これを「トウサン」と呼び「通さん」という意味です。この縄の中央道の真ん中に一枚の木札を垂れますが、この木札は横二寸に縦六寸余りのもので次の様な事が書かれています。

裏	表
急々如律令	善星皆来 福拜 道切 吉祥悠 安全 禪寺

この道切りは、毎年正月に取り替えられます。伊西、森茂の部落では神職の祈禱した木札がつけられ、岩井谷、和佐府方面では、福寿寺住職に書いて買った木札を用います。